

営農情報

第113号 平成23年12月5日発行

(イチゴ)

J A 福岡大城

南筑後普及指導センター

11月中旬より本格的な収穫が始まりました。高温のため果実の着色が早く、昨年よりも小玉でのスタートとなりましたが、現在では、夜温も下がってきたことから、玉伸びはしており、平パックの割合も増加しています。生育状況としては、早期作型において3果収穫程度、普通作型では緑熟から着色期程度となっており、頂果には先青や先白の発生が見られます。

11月が記録的な高温で推移し、ハウスを閉め込むようになって定期的に雨が降ったことから、灰色かび病やうどんこ病の発生が散見されます。

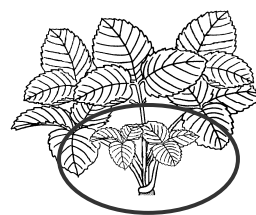
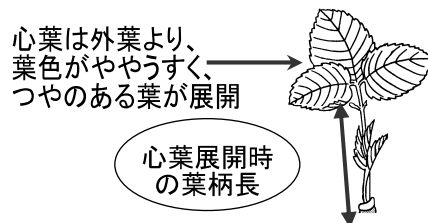
12月は2番果房の生育期であり、株の弱りは2番果房以降の収量減につながります。そのため、**株が弱らないような管理が重要です。**12月以降、急激な冷え込みと着果負担により、株が弱り、わい化してくるので、**見た目の生育に惑わされないよう、心葉の伸長状況を毎日確認して、早めの対応を行って下さい。**

電照時間の調整

電照は、株がわい化しないよう適切な草勢を維持し、3番果房までの連続的な出蕾を促進し、収量増加を目的に行う（11月下旬から12月上旬にかけては、3番果房の花芽分化時期でもあるため、草勢が強くなりすぎないことにも注意する）。

電照時間は、根の張りや着果負担の状況、天候、地力により変える必要があるため、**常に草勢（特に心葉の展開状況）を観察し、その後の生育を予想して、30分～6時間で調整する。**立ち上がり過ぎているようでも、**厳寒期は電照を完全に切らないこと。**

【心葉展開時の葉柄長の測定】



わい化状態の心葉

【心葉展開時の葉柄長と電照時間調整】

心葉展開時の葉柄長	8 cm以下	9～10 cm程度	12 cm以上
電照時間	時間を長く	現状維持	時間を短く

温度管理

果房の収穫前（肥大期）は高めの管理とし、収穫期（着色期）は低めの管理とする。

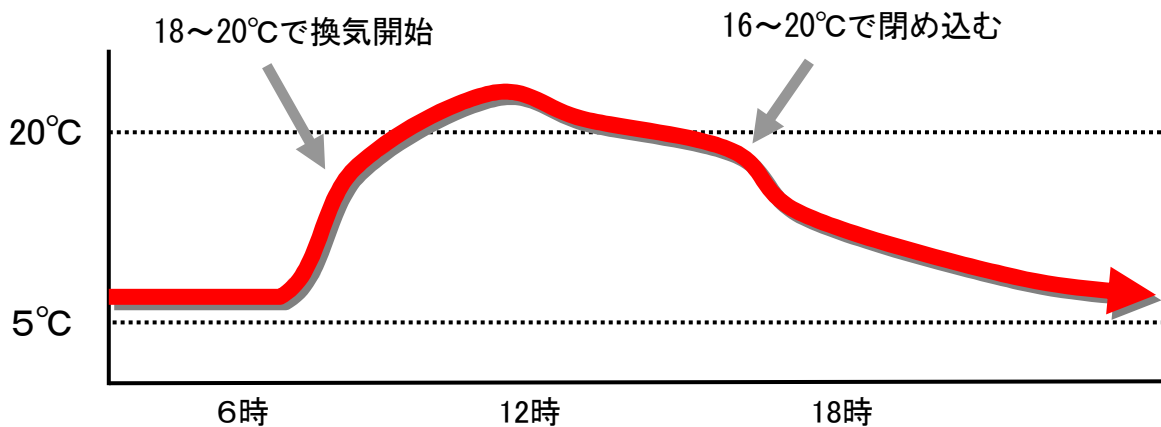
※ 株が小さく生育が遅れている場合は、やや高めの温度管理で生育促進を図る。温度を高めた場合は、必ず、かん水量を増やす（間隔を短くする）。

生育ステージ	昼間	夜間	備考
1番果房収穫期	20~24℃	5~7℃	収穫中は品質向上のため低めの温度管理 12月中旬以降はやや高めに変更
1番果房収穫終了後 2番果房出蕾~肥大期	24~28℃	5~7℃	2番果房の生育促進と、3番果の早期出蕾を目的として高めの管理

- 換気するときには、株に直接冷風を当てないように、少しずつ、2回以上に分けて開ける。
- ハウスの谷からサイドの順に換気する。
- 風上側のサイドは風下側よりも狭く開ける。
- サイドの内側には内ビニルを張り、風が直接吹き込まないようにする。



1日の温度管理の例



かん水管理（pF目標値1.7～1.8）

- 少量多回数かん水に心がける。高温管理する場合は、かん水量を増やす。
- 地温を下げないように、できるだけ晴天日の午前中にかん水する。
- 着果負担やなり疲れ、根傷みでも葉水を打たなくなるので、マルチ上から指で触ったり、マルチをめくったりして水分状態を確認する。過湿は根傷みを助長する。

＜かん水不足の見方＞

- ★心葉の先に葉水（溢液現象）がなくなる。
- ★葉や果実のツヤがなくなる。
- ★収穫する時に、果実と果梗の離れが悪い。
- ★ガクがやや萎れる。
- ★通路に亀裂がある。

肥培管理

液肥は株が弱らないように定期的に施用する。

窒素成分で0.5～0.7 kg/10 a の液肥を月に3回施用する。

例年、先青果や先白果の発生が多いほ場では、施用量を減らすか、施用を控える。

2番花房の出蕾が遅れた場合は、窒素分の吸収量が多くなり、2番果房の果形が乱れやすくなるため、1番果房終了～2番果房着色期までは追肥をしない。

ジベレリン処理（ジベレリンの総使用回数は10回以内）

2番果房出蕾期に、草勢が弱い場合は5 ppm程度で5 ml/株の処理を行う。

ただし、出蕾前に株のわい化が予想される場合は、出蕾前でも処理を行う。

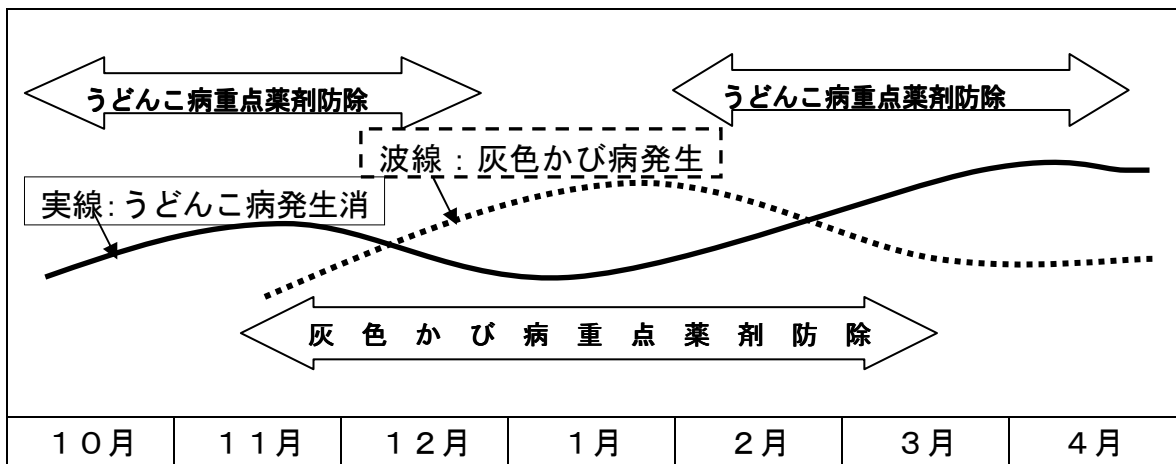
玉だし、摘果、果梗・古葉の除去

- 葉陰で光が当たらないと黄種果になるので玉出しする。果梗折れに注意する。
- 1～2番果房間葉数が4枚以下である場合は1番果房の着果数を1果梗あたり3果以下とする（11月の管理参照）。
- 早進株は株疲れしやすいため、1番果房と2番果房を併せて10～12果/株に摘果する。
- 小果は、不受精による奇形果になりやすいので、摘果する。
- 1番果房の収穫が終了したら、すみやかに果梗を除去する。
- 葉かぎする葉は、葉面積確保のため、傷んだ葉や黄化した葉のみとする。

その他

- 成り疲れを軽減するため、発根促進剤（チャンス液など）を流し、根の発達を促す。
- 冷え込みによりミツバチの活動が低下しやすくなります。ミツバチの訪花状況には常に気をつけ、異常がある場合はすぐにJAまたは普及センターに相談して下さい。
- 炭酸ガス発生装置は、日の出時に濃度が2,000ppm程度になるようタイマーをセットし、早朝の換気を避ける。また、硫黄くん煙剤を使用する場合は、亜硫酸ガスが発生しないよう硫黄くん煙剤処理終了後3時間以上あけてから炭酸ガス発生装置を稼働させる。

病害虫防除



○灰色かび病・菌核病

多湿なほ場で発生が多くなるので、換気に努め、曇雨天日は加温機で送風するなど湿度を下げる。

○うどんこ病

高温で軟弱な株に発生しやすいので、多発したほ場ではやや低めの温度管理を行う。

※ 灰色かび病、うどんこ病は、発病部位を速やかにハウス外に持ち出す。また、定期的な薬剤散布による予防に努める。

○ハダニ類

12～1月はハダニ類の活動が衰える。ハダニが見られるほ場ではこの時期に発生を抑えておかないと2月以降に急増するので防除を徹底しておく。

○スリップス類

年内に飛び込んできたスリップスをしっかりと防除し、ハウス内で越冬させない。薬剤散布の際にはミツバチへの影響日数に注意する。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！